

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日
令和元年六月一日発
百特別秋水誌第六二七号
百二十二巻第六号

ホトトギス

六月号



風雅の小筥〔十七〕

廣太郎

「季題は俳句の命です」とはその昔、ある現代俳句の旗手とも言える人が某新聞の俳壇選者に就任するにあたって語った言葉で、この方の言としては少し不思議な心持ちがして未だに覚えているが、我々花鳥諷詠を信奉する者にとつては、正にこの言葉は至言とも言えるだろう。これに伴つてやはり歳時記は必需品であり、バイブルのように思つておられる方も多いのではないだろうか。バイブルといえば、現在でもこのような方がおられるかどうかは判らないが、地方の指導者的な立場の方で「句作の時は『虚子編新歳時記』しか使つては駄目」とおっしゃる方が実際おられたという事を聞いた。勿論虚子編の歳時記は永遠のベストセラーと言える程文学的価値の高い名著である。ただ、実作としては、現代という時代はやはり少し変わってきた事は否めないのではないだろうか。そんな便を考慮して、虚子編を踏襲する形で編纂されたのが昭和六十一年五月三十日発行の『汀子編ホトトギス新歳時記』なのである。当時の実作に適つた虚子編の改訂版とも言えるものであつた。その後平成八年二月一日発行の『ホトトギス新歳時記改訂版』は主に例句の入替に止まつたが、平成二十二年六月一日発行の『ホトトギス新歳時記第三版』では三十もの新季題が採用された。新季題を採用するにあつてのプロセス等は来月のこのコーナーで申し上げたいと思うが、花鳥諷詠は、決して過去の単なる盲従ではなく、伝統を踏まえた新しさを常に追求するという理念ではないだろうか。

旬日記 汀子

平成三十年六月二日 芹屋ホトギス会

咲きそめし未央柳に頼む留守
夜の帳下りるを待てぬ蛩狩
稽古会済ませし安堵明易し
海そこに山近づけて夏の川

六月三日 下朗句会

老鶯に誘はれしごと山路行く
いつ咲きていつ萎えしかと女王花
蝸牛にも急ぎたき心あり

六月四日 ロイヤル俳壇

薫風や庭に出てみるだけのこと
又誰か転びしと聞く梅雨入りかな
薫風に誘はれゆく心あり
あつてなき心構へや梅雨に入る

六月八日 工業倶楽部

梅雨入りせしとは言ふばかりなる日和
鮎膳に向ふ川音聞く二階
用事増えたるを覚悟の梅雨入りかな

六月十二日 大阪倶楽部

東京の滞に於て梅雨に入る
体調に一喜一憂明易し
梅雨の旅とて心の荷携へて
明るさも暗さも梅雨のものとして
薫風を入れて朝のはじまりぬ

六月十二日 綿業倶楽部

杜若より歩を移す水辺かな
雨誘ふ如くに咲けり杜若
二三人集ひたるより風薫る
薫風や雨のち晴となる外出

六月十四日 清交社

わが庭に植ゑたくなりぬ花石榴
鮎の宿とて届きたる案内状
出水禍の記憶はいつも新しく
わが街の出水も過去のものとなる
雨多き日々に咲き継ぐ石榴かな
川音の二階へ届く鮎の膳

六月十六日 北近畿ホトギス俳句大会前日句会

五月晴明智最扇の城下町
城下町は坂多く緑濃し
梅雨晴の青空仕上げ行くために
六月十七日 北近畿ホトギス俳句大会

邂逅の尽きぬ語らひ朝涼に
片陰の山路に出逢ふとき仲間

六月十九日 有恒俳句会

火取虫部屋のどこかが開いてをり
地震ありしことと梅雨の一日かな
皆無事を確かめしより会の夏
幹事まだ着かぬ鮎膳あり地震の夏
入梅と聞きて雨なき二三日
露涼し地震二日目となる集ひ

六月十九日 無名会

留守多き主と知らせて草茂る
旅共にせしを語らん涼しさよ
一枚となるまで庭の草を引く
地震の夏過去の記憶の甦る
蝸牛逃げ足はやくこと確か
草が所在いづから知りぬ蝸牛

六月二十日 夏潮句会

父の日の花束として預かりぬ
地震ありぬ加へて梅雨の降りつる
黒南風や旅心なほ失せぬ日々

今宵咲く月下美人と思ひけり
ジャカランダ咲きて明るき梅雨一日
黒南風や加へて地震のありし日に
六月二十二日 アネモネ句会

人悼み人を偲びぬ青嵐
雨の夏至気づかず過ぎてをりにけり
青嵐かへて雨の一日かな
蜘蛛の網払へば庭へ涼しき灯

夕食のあと紅茶に涼しき灯
六月二十五日 きさらぎ会
三瓶への旅の近づく夏野かな
子等減りて夏野広々あるばかり
亡き友と歩きし夏野偲ぶ日に
悲しきは心に秘めて夏野歩す

蝸牛よみゆつくりと消ゆるもの
六月二十八日 句会と講演の会

わが留守を守宮に托し旅にあり
風絶えてそこに網戸のあるばかり
勝手口出入り自由の網戸かな

六月二十九日 時雨句会

見かけなくなりしは蠅もその一つ
夏帽子いつもの彼女とは違ふ
万緑を抜けて万緑つゞら折り
年取りしことを忘れて夏帽子
バスポート切れて残りし夏帽子

夏至過ぎて何か淋しき心かな
六月三十日 芹屋ホトギス会

筒抜けの声か網戸に加はりぬ
口にして今日の暑さの中に居り
虹消えて消えざるものの中に立つ
咲き終りたるも女王花の矜持

廣太郎句帳

廣太郎

平成三十年六月十日 若屋ホトギス会

日本人枢機卿生れ明易し
夙川の闇を束ねて蛩舞ふ
夏の川星野仙一邸見上げ

六月三日 野分益屋例会

司教座に慶事天竺葵か
喜びの流れて来たる夏の川
ローニウムへの道開かれて夏
ゼラニウム咲かせ司教は句友かな

六月三日 青嵐会若屋例会

青空に手を突つ込めばさくらんぼう
さくらんぼ食みて司教になられしと
網戸より洩れくる五番五楽章

六月四日 カトリック新聞記者吟

枢機卿司教俳人五月晴

六月七日 蕉心会

川風に青蔦の色育ちゆぐ
橋桁を吊り上げてある五月晴
川面舐め折れ曲りたる南風かな
橋潜るより遊船の音となる
黒南風の色を奪うて楳ぐ日差
五月晴明日は西へと繋げたく
鷗飛ぶ黒南風白く塗り替へて
額の花一本に統べられし庭
風に耐へ咲き残りたる沙羅一花

六月八日 六甲会

五月闇黄を主張せし館の花
五月闇払ひ句友に慶事かな

大都市の視界奪ひし五月闇
大琵琶を小さく凹ませあめんぼう
恋の数ほど五月闇濃かりけり
六月十日 (公社) 日本伝統俳句協会通常総会

梅雨寒を払ふ俳句の未来かな
六月十一日 朝日カルチャー若草句会

亀の子に母なる池となりゆける
万緑を越え万緑を越え西へ
六月の雨夕暮を引き寄せて
名園の朝六月の色に明け

六月十四日 土筆会

水底に消ゆ亀の子の刹那かな
回りつつ地球青から万緑へ
梅雨空と聞き合ひたる日差かな
著我咲いてみよし野時を重ねゆく

六月十五日 北國文芸選者吟

さくらんぼ君の唇染め上げて
路地奥に佃煮匂ふ椰雨晴間
夕闇を拒む吉野の著我畳

六月十六日 北近畿ホトギス大会

梅雨晴を突き刺してある天守閣
大江山あの山と思へば涼し
露涼し墓石を城の石垣に
涼しさは丹波の一会ありてこそ

六月二十一日 登高会

千年の靈気放ちたる汗涼し
健脚を取り戻したる汗涼し
蟹怒る鉄の角度六十度
この下に活断層や草を引く

六月三十日 若屋ホトギス会

砂の色して磯蟹の消えゆけり
人の手が神の御業の草を引く
菖蒲池年尾立ちしはこの辺り

紫に明けゆく園の菖蒲池
六月二十一日 「河内野」関東大会
新主宰 囲みし 緑 灯 涼 し
六月二十四日 青嵐会東京例会

梅雨空を掻き混せてある鳥語かな
公園に咲くもの嬉々と梅雨かな
梅雨傘を買おうて句心整へる
一と雫より青梅の育ちゆく

六月二十四日 野分益屋例会

鷗尾の先より白南風の生れゆく
夏の川渡れば大気入れ替る
ゼラニウムいよ狭庭となりゆけり
ゼラニウム色に迷ひのなかりけり

六月二十六日 若水会

まひまひに水の躍つてをりにけり
百歳を目指し茅の輪を潜る母
菓の香に未来を秘めて茅の輪かな
魂を置き去りにして茅の輪かな

六月二十七日 目黒学園句会

黒南風に戦く電波塔二つ
青鷺に時といふもの無かりけり
青鷺の足が地球を回しをり
青鷺の己を人と思ふ所作

六月二十八日 ホトギス社句会

黒南風に染まり切つたる都心かな
本社より末社大きく茅の輪かな

六月三十日 若屋ホトギス会

新築の壁に守宮の主顔
玻璃越しの守宮の腹の息遣ひ
白亜紀の記憶守宮の足裏かな
番線が変り新大阪暑し

六月三十日 若屋ホトギス会

朝虹に富士全容を明さざる
月見草星の化身として三瓶

雑詠

廣太郎 選

現世より天国の道去年今年 東京 河野昭彦
 元日や一人足りずに献杯す 同
 亡き妻のレシピを継ぎし雑煮かな 同
 もう一度庭歩きたし春を待つ 長岡 安原 葉
 あれほどに回復の春待ちぬしに 同
 春待てず何に急かされ逝かれしや 同
 寒林や躑ぎし背に突放さるる 香川 湯川 雅
 手袋を落し切符を落し急ぐ 同
 紅梅や空はついでに見てをりぬ 同
 寒紅にふつと殺気のやうなもの 熊本 岩岡中正
 額より冬あたたかくなりけり 同
 ふところに嬰抱くやうな冬日向 同
 去年の闇抜けて今年の富士となる 袋井 湖東紀子
 元日の夕日となりて沈みゆく 同
 少しづつ変はる日常日脚伸ぶ 同
 過ぎし日々さらりと捨てて初暦 龍ヶ崎 今橋眞理子
 幼子の御慶囲みて一家あり 同
 二三羽に遅れ一二羽初御空 同

病床の枕に敷きて宝舟 神戸 千原叡子
 健康が私の取り得小豆粥 同
 人に謝し運命に謝して春を待つ 同
 初雪にしてこんな大牡丹雪 同 後藤比奈夫
 めづらしや六甲吹雪摩耶吹雪 同
 冬ぬくし父が居母がゐる如く 同
 毀れたる体内時計風邪の所為 相模原 木村享史
 仕方なし白旗掲げ風邪に臥す 同
 風邪の神去らずよ老をあなどつて 同
 笹鳴や山の産声聴くごとく 神戸 涌羅由美
 しろがねの潮の鋒なるさより 同
 凍雲に海は藍いろ失ひし 同
 厳寒の底一灯をもて学ぶ 同 山田佳乃
 阪神忌六千余てふ星の声 同
 寒牡丹快癒の窓を寿ぎぬ 同
 夜明けより先に鱈の光りけり 同 立村霜衣
 海よりも海の色して鱈(へ)の眼 同
 木の実植ふること胸の灯しとす 同
 人々や国の寒さの駅に立ち 東京 田丸千種
 冬帽子居眠るやうに覚めてをり 同
 パブ今もジュークボックス寒の月 同
 元号を予想し合うて寒雀 神戸 和田華凜
 鴨帰る余呉湖に影を残しつつ 同
 雛あられもて余すほど甘からず 同

雑詠句評（五月号より）

海原を大地としたる鯨かな 袋井 湖東紀子

地球上で生息する中では最大級の大きさを誇る哺乳類であるところの鯨は、海が生息地である事は周知の通りである。印象としては魚類をイメージするが、そんな不思議な生態もこの句には反映されているのではないだろうか。大きな鯨が大海原を大地としてダイナミックに生活しているのである。（廣太郎）

句の神の旅立ち筆紙ふところに 相模原 木村享史

様々な神が出雲に集まるといふ神の旅、田の神から疫病神、貧乏神まで歳時記に載っているが、俳句の神様とは。しかも、ふところには俳句手帳と筆記用具を持っている、ということとは、道中吟行して句作しつつ出雲へ向かうのだ。つまり神社で柏手を打ち、佳い俳句が授かります様に、などと祈っている暇があったら寸暇を惜しんで吟行せよ、という作者のメッセージとも思えてくる。

（肖子）

年に一度出雲に神々が集う神無月である。八百万の神の中には当然俳句の神様も居られてもおかしくはない。結構この旅を吟行と洒落込んで句作をしながら出雲までの旅を楽しんでおられるのだらう。やはり句を認める為の紙と筆は神様でも必需品である。何とも愉快な句である。（廣太郎）

四海波耳馴れたるを謡初 神戸 後藤比奈夫

いかにも穏やかでめでたいお正月。家族打ち揃つての平和な謡初の風景である。謡曲「高砂」の一節「四海波静かにて……」そのもの。謡初は慣例の家庭行事だが、やはりこの「耳馴れた」「四海波」が一番だと、しみじみ諾っている作者。

この句のポイントは「耳馴れたるを」で、ここに、とくに新味はなくとも、耳馴れた曲を謡い昨年同様無事に過ごすことが何よりの幸福だという哲学が述べられている。

作者は三年前、九十九歳で句集「白寿」を上梓され、日本現代詩歌文学館賞が贈られた。「さまざまな苦難にも動じない軽やかな主体」の「飽くなき好奇心とユーモアの精神」と私は評したが、それは掲句の今日も変わらない。この句は、いかにもこの作者にふさわしく大らかでゆるぎない。円熟とゆとの一句。（中正）

天地有情

俱に病み語りて春を待ちぬしに	長岡	安原	葉
春を待ちぬたる遺影の語る声			
赤まんま第三幕のプロローグ	東京	稲畑	廣太郎
赤まんま地震の記憶を色に秘め			
宰相の心は奈辺	神戸	後藤	比奈夫
懐はなけれど心懐手			
師走病むとはもどかしきことならむ	相模原	木村	享史
春待たずして全快と聞く安堵			
師の見舞恭うし松の内	神戸	千原	叡子
病み抜けし夢より目覚め春を待つ			
金真砂撒きたるごとき蚩かな	福山	竹下	陶子
佐比売野の大月夜なる月見草			
筆づかひやさし呉春の絵双六	神戸	和田	華凛
半襟は白梅の柄春近し			
東京をかすめ一瞬風花す	東京	今井	千鶴子
町の名も梅ヶ丘とて梅早し			
ささやかな願ぎ事ばかり初詣	同	山田	閨子
福引やくじ運のなき父と子と			

日子選

山住の家路探梅ごころかな	宝塚	水田	むつみ
探梅の風の間合を潜りゆく			
寒雷のやうな一句を欲しけり	熊本	岩岡	中正
会釈して焚火にあたらせてもらふ			
命得し如くに独楽の回り出す	龍ヶ崎	今橋	眞理子
待春の空いつばいに枝ひろげ			
本復を実感しつつ春を待つ	神戸	三村	純也
避寒宿御用邸へも遠からず			
鳥のこゑからりと空へ夏来る	東京	今井	肖子
ごきげんな風に干さるゝアロハシャツ			
足下は真青なる海野水仙	袋井	湖東	紀子
声聞けば会ひたくなりし初電話			
探梅に立食ひ蕎麦といふ馳走	東京	大久保	白村
靖国に福引をひき卒業なる			
遠景の明石大橋秋晴れて	吹田	大橋	暁
大手門の歓迎の意か綿虫飛ぶ			
牧水のい行きいゆきし山眠る	群馬	中杉	隆世
山眠るその夢を見に来しわれぞ			